

保育原理 (追加内容)

2024.4.22.

担当 佐々木和

<補助内容>

1. 個と集団

2. 保育士の専門性

<個と集団>①

【遊びによってもたらされる創造的な体験】

①感覚遊び：5感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を通して
五感を通して心に刻まれる体験→生涯にわたって心の安らぎ
をもたらすものとして、記憶の奥深いところに残ると考えられて
いる

②象徴遊び

1歳から2歳前後になると、まねっこ遊び（見立て遊び）、
ごっこ遊び

新しい関係性の中に自分の身をおく→その対象にじぶんがな
ることで、対象への理解を深める

<個と集団>②

③ルールのある遊び

ルールを守って遊ぶ楽しさが味わえるようになると、身体を使ったゲーム（じゃんけん列車、フルーツバスケットなど）、卓上ゲーム（トランプ、はさみ将棋など）、スポーツ（野球、サッカーなど）、リレー、長縄跳びなどを通して、多様な友達や大人と関わりをもつ機会を広げていくことができる。

ルールを守る、ルールをつくる（自分たちで考える）

競争心：勝ち負け（勝ってうれしい、負けて悔しい）

例）リレー 挫折、仲間との協力、達成感、自己肯定感

<個と集団>③

【個と集団を活かした保育】

- ・ みんな同じにできることが発達？

一斉の場面ばかり強調

「みんなと一緒に行動がとれない」「苦手な活動なのでやりたくない」→「ダメな子」「手がかかる子」

これって、保育？

- ・ 自由に遊んでいればいい？

朝から帰りまで、長い時間子どもものつながりもなくバラバラに遊んでいる保育って、どう？自由保育？放任？

<個と集団>④

- 幼稚園や保育所は、集団施設
集団としての力を発揮する場が重要
(社会性、コミュニケーション、思いやり、自他の違いに気付く)
- 個が光る集団とは
個々の子どもが光るように、自分なりに選択できる多様な環境や遊びを用意する
個々の子ども達がしている楽しさが深まったり、広がっていくような保育者の援助や友達関係が必要

<個と集団>⑤

- ・ 個が光る集団とは（続き）

個々の子ども達が魅力的だからこそ、他の子ども達もやりたくなる
（友達関係）

一人で始めた遊びでも、その面白さが伝わればクラス全体に広がって
いく（周りの環境への関わる力）

- ・ 集団になじめない子に対して

一緒に活動ができないということは、何らかの理由がある

その子の個別的な思い、葛藤を無視して、やみくもに一緒に行動を
求めることは避ける

個別に関わり、心を開いて関われるよう、大切に関わる

その安心感が、集団保育の基礎となる（保育者はモデル）

<保育者の専門性>①

1. カウンセリングマインド（内面を理解する）

- ・心のつながりを大切にする
温かい関心を寄せる
- ・相手の立場に立って共に考える
保育者の持っている基準に照らして考えない
子どもの気持ちを受け入れる（自分の枠組みを横に置いて受け入れる）
- ・ありのままの姿を温かく受け止め見守る
- ・心の動きに応答する
相手がどのような状態にあるのかを、感情のレベルで感じとることが必要（耳を傾ける、行動を見守る）

<保育者の専門性>②

2.集団を育てる

- ・保育者と子ども、さらに子ども同士の心のつながりのある
温かい集団を育てる

→集団行動の訓練のような画一的な指導からは、生まれない

- ・子ども一人一人を、かけがえのない存在として接する保育者の姿勢を無意識のうちに子ども達は、自分の中に取り入れていく。どの子どもも集団の一員として、大切にされる姿勢を身につけていく。やがて、心のつながりを持った温かい集団をつくり出すことにつながる。

3.保護者の相談に応じる

相手の話を最後まで傾聴し、その気持ちを受け止めようとするのが大切（保護者の気持ちを大切にする）

・参考文献（参考書）

・岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行（監修）柴崎正行（編著）

「保育原理—新しい保育の基礎—」同文書院 2006

・森上史朗・大豆生田啓友著「よくわかる保育原理」

ミネルヴァ書房 2009

※民秋言・千葉武夫・河野利津子編著「保育原理 [新版]」

北大路書房 2014

※岡田耕一編著 「保育原理 子どもの保育の基本理論の理解」

萌文書林 2019